

デザインは〈目に見えるものから関係性へ〉 建築家の姿は〈巨匠から調停者へ〉



建築家の芦原太郎氏。住宅から公共建築、さらにはまちづくりまであらゆるジャンルの建築の設計を手がける一方、日本建築家協会の会長を務め、2期目を迎える氏の建築にむけた思いについて紹介する。

デザインとの出会い

建築家としてスタートを切ったときは、夢や希望を抱き、やる気に溢れていました。しかし、若い頃は世の中のことが全然わかりませんし、すぐにやりたいことが出来るわけではありませんでした。

その頃、デザイン界の重鎮のM氏から「建築家なのだから、一度家具をデザインしてみないか」と声を掛けていただきました。建築家の巨匠であるミース・ファン・デル・ローエ、ル・コルビュジエらは家具のデザインを手

がけていましたので、建築、都市を考えることはきつと家具にまでつながらのかもしれないと、異分野だと思っていた家具のデザインをして、ある展覧会に出展しました。

その後、Gマークの審査員に誘っていたとき、最初に任されたのはキッチン用品部門です。鍋や包丁など200〜300点も並んでいるなかからグッドデザイン賞にふさわしい商品を選出しなければなりません。畑違いの審査に困惑していたのですが、いっぱい並んだ商品を見比べていると不思議と優れたデザインが分かってくるのです。気が付いたら、他の審査員の方たちと一緒に議論していました。こうした経験が私にとって「デザイン」を勉強するよい機会となり、またそれぞれの分野で活躍されているデザイナーの方々と知り

合いになりました。

その頃Gマークの審査会における判断基準は、ちょうど変革期にありました。これまでの目に見える色や形が美しいものがグッドデザインだという見方に対して、色や形だけでなく目に見えない関係性のデザイン、ユニバーサルデザインやエコロジカルデザインなど社会性を持つものこそグッドデザインではないかと、デザインの概念や捉え方が見直されている時期でした。

自分は建築家だと思っていましたが、社会の要請により快適で豊かな生活をデザインしている建築分野のデザイナーなんだと気づきました。

翻って建築界では、巨匠は社会を啓蒙して理想像を作品として具現化していくのがこれまでの潮流です。学生当時は自分もいわゆる巨匠になりたいものだと思いを描いていました。社会との関係性をデザインしていくことが、これからの建築に必要な着眼ではないかと考えを改めるようになりました。

対話から生まれるデザイン思考 巨匠から調停者へ

私も1985年に独立したときは住宅を1軒こつこつと設計していま

した。

住宅の建築を設計していく中では、その節々でクライアントと一緒にあって対話を重ねていきます。まさにオートクチュールのやり方です。

ところがデベロッパからマンションの依頼が来るようになると様子が違います。いくら住む人の事を考えてのびのびとしたプランを提案しても、デベロッパは3LDKの部屋数がないといけないとマーケティングの調査結果を盾に譲りません。デベロッパとの仕事の場合は、その先にいるエンドユーザーの姿が見えてこない所が問題でした。

根気よく提案を続けた結果、事業スキームをブレイクスルーしてコーポラティブハウスのように、そこに住む人々の声でマンション設計を進め

ていくという、参加型のデザイン手法をマンション設計に導入する事もできました。

公共の仕事の場合では、宮城県白石市でまちづくりと二連の公共施設づくりを行ってきました。最初に市民参加型のまちづくりを提案した20年前当時は、どの自治体でも市民参加を謳いながら、なかなか実体が伴ってこないというのが実情でした。私たちはワークショップ手法の導入により市民との対話を行いながら公共建築の設計を行うことで、市民参加によるまちづくりを推進させてきました。

建築家はもはや世の中を啓蒙する巨匠ではなく、対話を通して物事をまとめる調停者となるのが重要だと思っています。

まちづくりは一過性のものでなく継続して行かなければなりません。まちづくりにおける建築は巨匠の作品ではなく、調停者のかかわる運動体としての姿だと思ふようになりました。

こうした考えは何も建築のみならずデザインの他の領域でも同じだと考えています。結局はデザイナーの根幹にあるマインドの部分は、同じなのではないかと思っています。

このデザイン概念はますます広がりを見せ、最近ではコミュニティデザイナーまで活躍されています。建築のデザイン、椅子のデザイン、社会のデザイン。これら現実社会をよりよいものへと促して行く運動体を動かして行くことが、デザイナーの役割にもなってきました。

■あしはら たらう プロフィール

建築家
芦原太郎建築事務所 所長
公益社団法人日本建築家協会 会長

個人邸から集合住宅やオフィスビルの開発プロジェクト、さらには市民参加型のワークショップ手法を設計に取り入れた公共建築まで、幅広いジャンルの設計を行っています。また、2010年より日本建築家協会の会長を務めるなど、社会活動も精力的に行っています。

略歴

1950 東京に生まれる。
1974 東京藝術大学美術学部建築科卒業。
1976 東京大学大学院建築学修士課程修了。
1977~1985 父・芦原義信の芦原建築設計研究所に勤務。
1985 芦原太郎建築事務所設立。
2001 芦原建築設計研究所代表を兼務。
2010 社団法人日本建築家協会会長に就任。

Architect
Managing Director of Taro Ashihara Architects
President of the Japan Institute of Architects

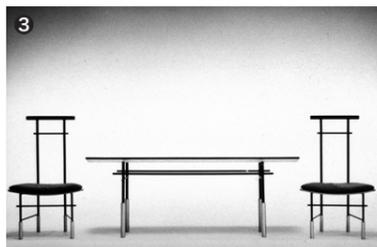
Mr. Ashihara has worked in design for a wide range of genres, such as private residences, development projects for housing complexes and office buildings, and even public architecture projects that implement ideas from public-participation workshops into the final design.

He has been president of the Japan Institute of Architects since 2010, and is working passionately on a number of social activities.

Career Summary

1950 Born in Tokyo
1974 Graduated from the Tokyo University of the Arts, Department of Architecture
1976 Completed a Master's Program in Department of Architecture at the University of Tokyo
1977 - 1985 Worked at Ashihara Architect & Associates, owned by his father, Yoshinobu Ashihara
1985 Established Taro Ashihara Architects
2001 Simultaneously held a representative position at Ashihara Architect & Associates
2010 Appointed president of the Japan Institute of Architects

3



① 公立刈田総合病院 (北山恒・堀池秀人氏との共同設計)
Katta Hospital
(designed together with Koh Kitayama and Hideto Horiike)

② 白石市立白石第二小学校 (北山恒氏との共同設計)
The Second Elementary School of Shiroishi
(designed together with Koh Kitayama)

③ TORII (天童木工)
TORII (Tendo Co., Ltd.)



市民のパートナーとなる建築家へ
エリート集団から
市民パートナー集団へ

私は日本建築家協会の会長を務め、現在2期目です。

そもそも建築家は15世紀のルネサンスの時代にフィレンツェのドウモを作ったブルネレスキのような技術と芸術の才能を併せ持つ天才にその起源があります。

18世紀になるとイギリスの貴族の荘園を管理するサーベイヤーと呼ばれる領地や建物のマネジメントをする人が現れ、建築家のもう一つの原型になるといわれています。

日本は明治時代に西洋建築と二緒に建築家ジョサイア・コンドルを雇い、西欧型の建築家教育を始め、辰野金吾や片山東熊らが最初の日本人建築家になりました。

それ以降100年以上に亘る、建

築家職能を日本に定着させる運動を継承しているのが、日本建築家協会になります。

以前は前川國男先生、丹下健三先生などエリート建築家のサロンでしたが、2013年に公益社団法人になる事を契機に地域に根ざし、市民のパートナーとして生活環境をより良くする建築家集団を目指しています。

東北の災害支援にもボランティアで活動しています。インフラ整備はすこしずつ進展するものの、住民にとつてみればまちの将来像が見えてきません。市民側に立った具体的な生活のビジョンづくりに向けて、対話を通して専門家として信頼を勝ち取っていかねばなりません。

災害に見舞われていない町であっても、市民の暮らしの中に入っている、安心・安全で、しかもそれが持続

可能な地域環境づくりに専門家として貢献していきたいと考えています。

TOKYO2020オリンピックを受け、東京は世界から注目が集まっています。その中、新国立競技場の設計コンペがありました。外苑の景観問題や規模や予算が大きいことが指摘されています。基本条件の見直しや市民への情報公開が必要だと思います。

災害の復興でもオリンピックの施設づくりでも行政、市民、そして建築家などの専門家が、対話を通してコンセンサスを創り出すことが必要だと思います。問題を解決し、様々な意見をまとめる調停者としての役割を、市民のパートナーとして私達建築家は果たしていきたいと考えています。